

新入生の大学適応において 同級生との交流が果たす役割

谷 田 林 士
神 戸 南 海
吉 田 俊 弘
神 達 知 純

要約

新入生が同級生と良好な対人関係を形成・維持していくことは、大学に適応するための重要な要因の一つと考えられる。しかし、近年では、学内での対人関係形成の抑制を促す外的な環境要因が強まりつつある。具体的には、学外での対人関係形成の機会を増大させる SNS の普及や、希薄化や選択化に代表される対人関係の質の変化などである。本研究の目的は、新入生の交流のある同級生との関係性を調査し、親密な同級生の存在が新入生の対人的側面での大学適応に影響を及ぼしているかどうかを検証することにある。春学期の終了時点で、交流のある同級生に対する親密度を尋ねた項目と大学への適応度合いを測定する尺度で構成された質問紙調査を実施した。大学適応の指標化として用いた大学生充実度尺度は、「フィット感」、「交友満足」、「学業満足」、「不安」の4つの下位尺度に分かれた。942名の新入生の回答を分析した結果、対人的側面の大学適応を示す「交友満足」を規定していたのは、学外でも一緒に遊ぶような同性の親密な同級生数のみであった。親密な同級生の存在が対人側面での適応を促進する可能性が示唆された。

1. 問題

近年、中央教育審議会の答申に基づいて大学教育改革が進行している。中でも2008年の「学士課程教育の構築にむけて（答申）」以降、各大学は単位制度を実質化すべく、様々な教育環境を整備し、学士課程を経て獲得できる知識や能力を明確化した。そして2012年の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、能動的学修、すなわちアクティブラーニングの推進が提言され、現在では教員の多くが能動的学修によって汎用的能力を育成することを意図した講義形式を採用している。講義内でディスカッションやグループワークを取り入れることが一般的となった。

上述のような大学の変化に伴い、新入生を対象とした初年次教育の内容も多様化している（川嶋，2018）。文章表現などのアカデミック・スキルの育成や大学の教育資源の活用の促進、将来の職業選択に関わるキャリア教育など多岐にわたる。しかし、杉谷（2018）が指摘しているように、初年次教育は、教育面のみならず、大学生活を円滑に移行することも目的の一つとしたものであり、正課のみならず、課外学習なども含めた総合的な教育プログラムとして位置づけられている。2012年度の答申以降、総合的プログラムとしての初年次教育の中に、アクティブラーニング型の授業が率先的に導入され、その教育効果も報告されている（河合塾，2010）。アクティブラーニングでは、他の受講生と授業内で討論することや、協働的な課題に取り組むことが多いため、初年次教育の中で、新入生が受講生である他の同級生と良好な対人関係を形成・維持できるような支援を行うことが課題となっている（亀倉，2015）。

これらの現状を踏まえ、本研究の第一の目的は、新入生の交流のある同級生との関係性を調査し、同級生の存在が新入生の大学適応の規定因であるかどうかを検証することにある。具体的には、教養課程としての初年次教育や専門課程での初年次開講科目において、同じ受講生やクラスメートとなる学科（コース）の同級生との関係性に焦点を絞り、春学期が終了した時点で新入生の対人関係を測定するための質問紙調査を実施する。そして、春学期に

開講された少人数制のゼミナールや初年次科目でのアクティブラーニングなどを通じて形成された同級生との対人関係が、対人的側面や学業面での大学適応に影響を及ぼしているかどうかについて分析を行うことを目的としている。

(1) 同じ学科に所属する同級生との対人関係

新入生は同級生との関係を形成していく必要があるにもかかわらず、学内での対人関係形成の抑制を促す外的な環境要因が強まっている。それは学外での対人関係形成の機会を増大させる SNS の普及である。日本人の対人ネットワークについての時系列比較調査を行った石黒（2018）によると、SNS を含む ICT（情報通信技術）の普及前後で友人数についての大幅な減少は見られず、むしろ若い女性では微増の傾向にあった。SNS 等を介して地理的制限を受けずに新たに人間関係を形成する機会の増加をその要因に挙げている。ICT の普及以前の大学生においては、同じ授業を受けるという同級生が日常的に接触することができる相手であったが、現在では、中学・高校の友人や趣味・バイトで知り合った学外の友人たちと SNS 等を通じて密接に連絡を取りあうことが容易にできる社会的状況である。

しかしながら、SNS は対人関係を維持する機能を備えている。入学後に知り合った同級生と関係を築きあげていくツールとして、ここ数年では「LINE」が用いられることが多く、新入生の LINE ネットワークと友人満足感の関連を調べた黒川・吉田（2015）の研究では、入学直後の 5 月の段階に、同級生との LINE の使用と友人満足感の関連が報告されている。

大学での対人関係は、同じ学科に所属する同級生のみが重要ではなく、部活動やサークルが同じ同級生や、その先輩・後輩などの多様な対人関係が、対人面の大学適応に影響している（高田，2014）。しかし、近年では入学直後から授業を通じて時間の多くを共有する同級生との対人関係への動機付けが大学適応に影響を及ぼすことが知られており（中山・中西・長濱・中島，2015）、さらに、アクティブラーニングの増加に特徴づけられる初年次教育が及ぼす新入生の大学適応に研究の関心を絞っているため、本研究では、同じ学科の同級生のみを研究の対象としている。

(2) 対人関係の分類

90年代に青年の対人関係が「希薄化」していることが指摘された（松井，1996）。その後、社会学を中心に議論が進み、友人関係の「選択化」や友人の多様性が減少している「同質化」が現代の青年の対人関係の特徴であるという説が提出され、その検証作業が行われている。例えば、辻（2016）の研究では、全国26大学を対象に大学生の対人ネットワークの実態についての調査が実施された。友人という主観的な表現を避け、親友、仲の良い友達、知り合い程度の友達という3段階に区分して、その人数を尋ねた。また、その3つの総数に関して、異性比率や大学での友人かどうかの比率などが調べられた。その結果、親友の人数は4.43人、仲の良い友達は17.6人、知り合い程度の友達は50.94人であった。この総数のうち、異性比率が16%、同じ大学の比率が33%であった。この調査は、大学生全体を対象としているため、新入生よりも友人の総数が多いと考えられるが、異性の友人比率の低さや同じ大学の友人比率が50%を下回っていることが示されている。

本研究の二つ目の目的は、新入生の友人の量的側面を検討することにある。新入生が春学期を終えた時点での対人関係についての調査を行い、同性と異性に分けて、新入生の同級生との対人関係の実態を把握することを目的としている。さらに、同じ学科の同級生に限定した対人関係の量的側面が大学適応と関連しているかどうかを明らかにする。本研究では、辻（2016）の友人分類を発展させ、いくつかの行動パターンから友人との親密度を5段階に分けて測定する。「深い絆」があるような親友、「2人で一緒に遊ぶ」や「大学外でも一緒に遊ぶ」ような仲の良い友達、大学内のみで「授業を一緒に受ける」や「挨拶を交わす程度」の友人の人数を同性と異性に分けて調査する。

(3) 大学適応の指標としての大学生生活充実度尺度

新入生は、入学直後に大学という新しい環境への移行という問題に直面する。特に高校での記憶中心の学習から大学での主体的な学修という移行がある。このような学修面での適応に関しては、出席状況や授業への取り組みと

いった具体的な指標によって大学に適応できているかを調べることもできるが、調査研究においては、大学に適応していると感じる程度について心理尺度を用いて測定し、その結果を大学適応の指標として用いる場合もある（大隅・小塩・小倉・渡邊・平石，2013）。本研究では、学修面の移行のみならず、新しい友人の獲得に代表される対人的側面への適応（広沢，2007）に関心があるため、奥田・川上・坂田・佐久田（2010）の大学生生活充実度尺度を用いて、その下位尺度である4つの概念を大学適応の指標として用いることとする。具体的には、学修面の大学適応を示す「学業満足」、対人的な適応を示唆する「交友満足」、大学全体への適応や不適応を示す「フィット感」や「不安」である。奥田ら（2010）は、この尺度を用いて、データを集積し、全学年の横断や年次を超えた縦断的な検討を行っている。大対（2015）は、「交友満足」高い学生ほど、ソーシャルスキルが高いという結果を報告しており、「交友満足」の基準関連妥当性についても確認されている。

本研究では、奥田ら（2010）の大学生生活充実度尺度を用いて、新入生の大学適応を測定する。そして、同じ学科の同級生との対人関係を量的に調査し、同性や異性の交流する同級生数が大学適応に影響を及ぼしているかどうかを検証することを目的としている。同級生数に関しては、親密度に応じて同級生を分類し、親密な関係の友人が多いほど、対人的側面で大学に適応しているかどうかを検討する。さらに、初年次教育におけるアクティブラーニング型の授業が近年増加していることから、学内で一緒に授業を受けたり、挨拶をしあったりするといった友人数の多さが学業面での大学適応と関連しているかについても検討を加える。

2. 方法

(1) 調査対象者

首都圏の文系総合大学において、 Semester制の教養教育必修科目を受講している4学部10学科の学生942名（男性419名，女性521名，その他2名）を調査対象者とした。平均年齢18.7歳（標準偏差：0.83）であった。

調査は2019年7月下旬の教養必修科目の第14回目または第15回目の授業中に実施された。この必修科目は春学期の初年次教育を担う科目であり、学科ごとのクラス編成（1クラス30人～40人）であった。この授業では、4年間の大学生活を有意義なものにするために、学修や時間の過ごし方を具体的に計画するキャリア教育的な学修内容を主とし、他の受講生とのディスカッションや協働性のグループワークなどのアクティブラーニングを積極的に取り入れた授業構成であった。

(2) 質問紙の構成

質問紙のフェイスシートでは、性別と年齢、所属学科・コース名と匿名性を保持するための特殊なID番号の属性情報への回答を求めた。

1) 交流のある同級生の総数と同級生への親密度

同じ学科・コースの同級生のうち、仲が良かったり、親近感を感じたりする順に10名の同級生のイニシャルを同性、異性ごとに記入することを求めた。心理的な距離の近いような同級生が10名に満たない場合は、その順位以下の欄を未記入のままにするように教示した。記入した同級生との関係性を調べるために、以下の5段階の対人関係のカテゴリーの中から、そのイニシャルの人物との関係性を選択するように求めた。対人関係の5段階は「1. 会ったら挨拶を交わす程度の関係」、「2. 大学内のみ付き合いで、一緒に授業を受けたりする関係」、「3. 仲の良いグループの一員として、大学外でも遊びに行く関係」、「4. 2人でご飯を食べに行ったり、遊んだりするような仲の良い関係」、「5. 悩み事を打ち明けるなど深い絆がある関係」であり、数値が上がるにつれて親密度が高くなるようにカテゴリーを設定した。

親密度に加え、それらの人物をどのように呼び、どのように呼ばれているかを尋ねたが、本稿では分析対象とせず、それらの結果の報告も省略する。

2) 大学生生活充実度尺度

大学適応の指標として、奥田ら（2010）の大学生生活充実度尺度（45項目）を使用した。この尺度は、「フィット感」、「交友関係」、「学業満足」、「不安」

の4つの下位尺度により構成される。回答方法は7件法（「1:全くそう思わない」～「7:強くそう思う」）を用いた。

「フィット感」は、大学や大学生活が自身の抱いたイメージと一致し、自分に合っていると感じられるかを表す構成概念で、16項目から構成される。具体的には、「大学では積極的に取り組めるものがある」、「大学で自分が成長できそうだ」、「自分のやりたいことが大学で見つかりそうだ」等の項目である。

2つ目の下位尺度は「交友満足」であり、大学内の友人との関係に満足しているかを表す概念であり、11項目で構成される。項目例は、「学内の友人関係に満足している」、「大学では周りの人と楽しい時間を共有している」、「大学で本当に親しい友人はいない」等である。

3つ目の下位尺度は「学業満足」である。これを構成する一部の質問項目では、奥田ら（2010）の対象学科に合わせて「心理学科では～」という表現が用いられている。本研究では、この所属学科名について項目内容の変更を行った。具体的には、「心理学」や「心理学科」という用語を「自分の所属している学科・コース」に変更した。大学での学修内容や大学環境に対する満足感を表す概念で、8項目から構成される。項目例は以下である。「学びたいことが大学で学んでいる」、「興味のあることが大学で学んでいる」、「自分の所属している学科・コースの授業内容に満足している」等であった。

最後の4つ目の下位尺度は「不安」である。大学生活の中で感じる漠然とした不安を表す概念である。「これからの大学生活の先が見えず不安である」、「将来の進路について不安である」、「4年間の大学生活で何をしたら良いかわからない」、「ちゃんと卒業できるかどうか不安である」という4項目から構成される。

(3) 倫理的配慮

質問紙調査実施に際し、事前に調査を実施する大学の研究倫理審査を受け、実施の許可を得た（第19－20号）。教養共通の必修科目の受講生全員を対象とした調査であるが、質問紙の表紙冒頭に、調査意図を説明し、回答の匿名性を保証するためのID番号の説明や、そのIDを用いて今後の大学適応度

を追跡する調査を実施する可能性を記載した。それらの説明文を読み、調査へ同意した場合のみ、質問紙への回答を行うことが教示された。

3. 結果

(1) 大学生生活充実度尺度の記述統計量

奥田ら(2010)の大学生生活充実度尺度では、4つの下位尺度に分かれており、それぞれの尺度内の項目一貫性を検討するために、 α 係数を算出したところ、「フィット感」は0.92、「交友満足」は0.89、「学業満足」は0.87、「不安」は0.78であった。全ての下位尺度の内的整合性が高いと判断し、これらを尺度として用いることとした。それぞれの平均値(標準偏差)は、「フィット感」4.92(0.94)、交友満足4.93(1.01)、学業満足5.09(1.06)、不安4.23(1.24)であった。

その他の性別の2名を除外し、940名を分析対象者として、大学生生活充実度尺度の4つの下位尺度ごとに性別ごとの平均値を比較した結果、「学業満足」の性差のみが有意であり($t(938)=3.66, p<0.01, d=0.24$)、男性(4.95)よりも女性(5.20)の学業満足感が高かった。

(2) 交流のある同級生

交流のある同級生に関して、同性と異性に分けて、親近感のある順に(最大10人)その人物のイニシャルの記入と親密度の回答を求めた。ただし、交流のある同級生が10人に満たない場合は、その順位以下の欄を未記入のままにした。

1) 同性の同級生

同性の同級生において、交流のある同級生として記入した人数の平均は5.14人(3.32)であった。10人すべての同級生を挙げることはできたのは回答者の19.63%(185人/942人)であった。一方、回答者の12.63%(119人/942人)は、同性の同級生を一人も挙げることはできなかった。

性別ごとの同性の同級生数は、男性は 4.76 (3.70)、女性は 5.47 (2.97) と多く、その差は有意であった ($t(938)=3.16, p<0.01, d=0.21$)。

交流のある同級生を 1 人以上挙げた回答者を分析対象 (854 名) として、同級生に対する親密度のカテゴリーの比率を算出した。同性に関しては、「挨拶程度」が 6%、「学内のみの関係」36%、「学外でも遊ぶ」24%、「2 人で遊ぶ」20%、「深い絆」が 13%であった。このカテゴリー比率を図 1 に示す。

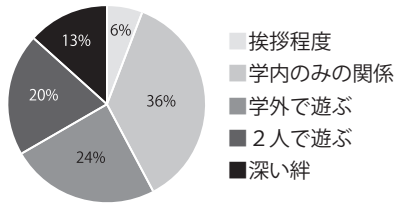


図 1 同性の同級生の親密度のカテゴリー比率

本研究では、3 番目のカテゴリーである「仲の良いグループの一員として、大学外でも遊びに行く関係」以上の関係を示す同級生を同性の「親密な友人」、学内のみの関係で挨拶を交わしあうような関係 (1 番目と 2 番目) の同級生を「大学のみ関係友人」として定義し、それぞれの友人数を求めたところ、同性の親密な友人数は 3.02 人 (2.94)、大学のみ関係友人数は 2.13 (2.53) であった。

性別ごとに分けて算出すると、男性の親密な同性友人数は 3.06 (3.30)、女性は 3.00 (2.62) であり、親密な同性友人数について有意差は見られなかった。一方、大学のみ関係友人数においては、男性が 1.72 (2.39) に対して、女性は 2.47 (2.59) と多く、その差が有意であった ($t(938)=4.59, p<0.001, d=0.30$)。女性の方が同性の同級友人総数が有意に多いという結果が得られていたが、友人の性質に分けて検討した結果、大学のみに限定した付き合いの同性の同級生のみが女性が多いことが示された。

2) 異性の同級生

異性の同級生の人数の平均値は 1.49 人 (2.26) であった。10 人全員記入した回答者は全体の 2.34% (22 名 / 942 名) であり、全く異性の同級生がいない回答者の割合は、過半数を超える 53.50% (504 人 / 942 人) であった。性別による差はなく、男性の異性友人数は 1.62(2.46)、女性は 1.40(2.09) であった。

交流のある同級生を 1 人以上挙げた 439 名 (全体の 47%) を分析対象として、親密度のカテゴリ比率を算出した。異性の親密度のカテゴリに関しては、「挨拶程度」が 24%、「学内のみの関係」46%、「学外でも遊ぶ」18%、「2 人で遊ぶ」6%、「深い絆」が 6% となった。大学のみの関係比率は 7 割となった。

異性の同級生に関しては、異性の同級生数の平均が 1.49 人と少なく、その内過半数以上の関係が大学のみ限定した対人関係であった。

同級生の同性と異性の友人総数、及び同性友人の内訳を表 1 に示す。

表 1 対象別の同級生の友人数の平均値 (標準偏差)

	全体 (n=942)		男性 (n=419)		女性 (n=521)		男女差 t 値	効果量 d
	平均値	標準 偏差	平均値	標準 偏差	平均値	標準 偏差		
同級生の総数								
同性	5.14	3.32	4.76	3.70	5.47	2.97	3.16**	0.21
異性	1.49	2.26	1.62	2.46	1.40	2.09	1.49	
同性友人の内訳								
親密な同性友人	3.02	2.94	3.06	3.30	3.00	2.62	0.30	
大学のみの関係友人	2.13	2.53	1.72	2.39	2.47	2.59	4.56***	0.30

*** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$

(3) 大学適応に影響を及ぼす同級生数

大学適応の指標として、大学生活充実度尺度の下位尺度で測定される 4 つの構成概念を使用した。それらの下位尺度を従属変数とし、性別 (男性 = 0、女性 = 1)、同性の親密な友人数、同性の大学のみの関係友人数、異性の同級生総数を独立変数とするステップワイズ法による重回帰分析を下位尺度

ごとに実施した。

「フィット感」を従属変数とした分析では、異性の同級生友人総数 ($\beta = 0.04, p < 0.05, 95\% CI [0.00, 0.06]$) と同性の親密な友人数 ($\beta = 0.02, p < 0.05, 95\% CI [0.00, 0.05]$) の標準偏回帰係数が有意であり、調整済み決定係数 (R^2) は 0.02 であった。

次に「交友満足」に関しては、同性の親密な友人数 ($\beta = 0.12, p < 0.001, 95\% CI [0.09, 0.14]$) の標準偏回帰係数のみを用いた回帰式が有意であった。決定係数は 0.12 であった。

「学業満足」では、性別 ($\beta = 0.23, p < 0.001, 95\% CI [0.09, 0.36]$)、同性の親密な友人数 ($\beta = 0.05, p < 0.001, 95\% CI [0.02, 0.07]$)、同性の大学のみの関係友人数 ($\beta = 0.04, p < 0.05, 95\% CI [0.00, 0.06]$) が有意であり、調整済みの決定係数 (R^2) は 0.02 であった。

最後に、「不安」に関しては、どの独立変数を投入しても有意な回帰式を得ることができなかった。

これらステップワイズを用いた重回帰分析の結果を表 2 に示す。

表 2 大学生生活充実度尺度の下位尺度ごとの重回帰分析の標準偏回帰係数 (β)

	従属変数			
	フィット感 β	交友満足 β	学業満足 β	不安 β
独立変数				
性別			0.23***	
同性：親密な友人数	0.02*	0.12***	0.05***	
同性：大学のみの関係友人			0.04*	
異性の友人総数	0.04*			
調整済み R^2	0.02***	0.12***	0.03***	0.00

*** $p < 0.001$, * $p < 0.05$

4. 考察

(1) 新入生の大学適応を規定する同級生の交流

本研究では、複数の側面の大学適応を測定するために大学生生活充実度尺度

を用いた。その下位尺度である4つの側面の大学適応に、大学生の交流のある同級生数が影響を及ぼしているかを検討するために、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。

対人的側面での大学適応の一つの指標と考えられる「交友満足」に関しては、同性・異性にかかわらず交流のある同級生の数や、親密な友人数が影響を及ぼしていることが予想されたが、重回帰分析の結果、大学外でもグループで一緒に遊びに行くような親密な交流を深める同性の同級生数のみが交友満足を規定していた。すなわち、大学生としての対人関係に満足するためには、親友と呼べるような学外でも友好を深めていく同級生の数を増やしていくことの重要性が示された。ただし、この回帰モデルの決定係数が0.12であったため、親密な同性の同級生のみを用いた交友満足の予測力の精度はそれほど高くなかった。今後の課題として、本研究では対象外としていたサークルや部活動の対人関係を加え、総合的な親密な友人数の規定力を分析することが課題である。

近年、アクティブラーニング型の授業を通じて新入生の対人関係を形成する機会が増加しているが、同級生数についての本研究の結果は、その同級生との交流が授業内だけで終結したり、学内のみに限定されていたりする可能性を示唆している。大学で顔を合わせた際に挨拶を交わす程度の関係の同性の同級生を含めても、5人程度の同級生の友人数であり、最大の10人まで同級生を挙げ続けることができた回答者の割合は20%を下回る程度であった。これらの結果が示すことは、深い対人関係を避け、他者からの悪く思われまいように評価を気にしながら、傷つけあわないような表面的な関係（岡田, 1995）が新入生の対人関係の多寡を占めるほどに拡大している可能性である。新入生の対人的側面での大学適応を促進するためには、授業内でのアクティブラーニング型のディスカッションやグループワークに加えて、そこでの対人関係が授業の枠を超え、より親密に発展することができる支援策が重要となる。

しかし、挨拶などだけを交わすような表面的な関係を含めた同性の同級生の数の多さや同性の親密な同級生数が、学修面での大学適応を示す「学業満足」を規定していた。しかし、これらの回帰モデルは決定係数がかなり低いため、

同級生の存在が学修に対して肯定的な影響を持つという知見は限定的な解釈として留めておきたい。

異性の同級生数に関しては、大学への「フィット感」のみ効果を持ったが、同様に決定係数が低いため、結果の報告のみとする。ただし、半数以上の初年次生が異性の同級生との関わりを持たず、全体を通して1.5人程度の異性友人数であるため、床効果が生じた可能性もある。大学生の恋愛関係を含めて、なぜ異性との交流が進まないかを検討することが今後の課題である。

(2) 交流する同級生の量的検討

本研究が親密な友人の定義として採用した、学外でも遊ぶ以上の関係の同性の同級生数は3人程度であった。大学内での軽微な関係を含めても同性で5.14人、異性に関しては1.49人であった。本研究では、一つの大学での調査結果であるので、結果の一般化には限界があるが、辻(2016)の結果と比較しながら考察を進めることにしたい。辻(2016)では親友と仲の良い友人の合計が20名を超え、その同じ大学比率の33%を加味すると、6名程度であるが、本研究では約3名であった。ただし、本研究は新入生を対象としており、同じ学科に所属する同級生という限定があるため、大幅な減少でない可能性がある。近年、“イツメン”と呼びあうような親密度の高い同性友人とLINEなどのSNSを介して常に連絡を取り合うような常時接続と呼ばれる関係が形成され、その数人で構成された友人以外との新たな関係を形成しないことが指摘されている(土井, 2016)。本研究では、親密な友人が多いほど交友満足が高くなることが示されたが、今後の課題として、親密な友人が同じグループの友人数の多さを意味しているものか、あるいは、異なるグループの友人も含めた友人の多様性を示すものなのかを詳細に検討していく必要があるだろう。

文献

土井隆義(2018)「流動化する社会関係、固着化する仲間集団—若者のネット依存をめぐる虚と実—」『日本情報教育学会誌』1, 15-22.

広沢俊宗(2007)「大学新入生の適応に関する研究(I)—学修面での適応—

- 不適応に関わる諸変数の検討—」『関西国際大学研究紀要』8, 121-138.
- 石黒格 (2018)「第2章 ネットワーク・サイズの変化」石黒格 (編)『変わりゆく日本人のネットワーク ICT 普及期における社会関係の変化』勁草書房, pp.45-72.
- 亀倉正彦 (2015)「失敗マンダラを活用したアクティブラーニング授業の失敗事例分析とその知識化—学生の『やる気』を引き出す観点から—」『NUCB Journal of Economics and Information Science』59, 123-143.
- 河合塾 (編) (2010)『初年次教育でなぜ学生が成長するのか—全国大学調査からみえてきたこと—』東信堂.
- 川嶋太津夫 (2018)「3章 多様化する高校と大学の教育接続」初年次教育学会 (編)『進化する初年次教育』世界思想社, pp.32-55.
- 黒川雅幸・吉田俊和 (2016)「大学新入生における LINE ネットワークと友人満足感および精神的健康との関連」『実験社会心理学研究』56, 1-13.
- 松井豊 (1996)「親離れから異性との親密な関係の成立まで」斎藤誠一 (編)『人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係』培風館, pp19-54.
- 中山留美子・中西良文・長濱文与・中島誠 (2015)「初年次前期の授業での対人関係への動機づけが大学適応に及ぼす影響」『心理学研究』, 86, 170-176.
- 岡田努 (1995)「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」『教育心理学研究』, 43, 354-363.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田裕子 (2010)「大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生生活充実度の推移」『大阪樟蔭女子大学 人間科学研究紀要』9, 1-14.
- 大隅香苗・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二 (2013)「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討」『青年心理学研究』24, 125-136.
- 大対香奈子 (2015)「大学生生活充実感を規定する要因の検討」『近畿大学総合社会学部紀要』4, 47-57.
- 杉谷祐美子 (2018)「1章 初年次教育研究の動向と課題——初年次教育学会における研究活動を中心に」初年次教育学会 (編)『進化する初年次

教育』世界思想社, pp.8-19.

高田治樹 (2014) 「大学生サークル集団への態度の探索的検討——否定的態度を含めた態度パターンの分類——」『青年心理学研究』26, 29-46.

辻泉 (2016) 「大学生たちのパーソナル・ネットワークの実態：2010年全国26大学調査から探る」『大妻女子大学 人間関係学部紀要 人間科学研究』18, 125-139.